
父、帰る！？

城市佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父、帰る！？

【Nコード】

N6704I

【作者名】

城市佳

【あらすじ】

半年前に死んだ親父が帰ってきた！

ゴースト？

どたばたホームコメディ

1話 はじまりの電話（前書き）

昨年から連載していたものを、間違えて消してしまいました。
読んでいただいた方、評価、感想をくださった方、
大変申し訳ありませんでした。

1話 はじまりの電話

親父が死んでから、半年が過ぎようとしていた。

通夜、葬式、もろもろの手続きやら片付けやらを済ませ、

やっと俺たち、俺と妻の美幸、そして一人残されたお母ちゃんに、それまでと同じような毎日が訪れた。

最近になってようやく、喪失感のようなものが

わいてきて、時々悲しくなる。

とはいえ、いつまでもそんな感傷に浸ってなんかられない。
もうすぐ家族が増えるのだから。

臨月に入った大きなお腹を愛しそうにさすりながら

美幸は夕食の支度をしている。

茶碗を出したり、鍋を洗ったりを手伝いながら、

俺は幸せを噛みしめていた。

初孫を見ることなく、

突然に逝ってしまった親父には申し訳ないが、
生きていく者は前を向いて歩くしかない。

うん、そうだ、こうやって妻をいたわり、

頑張る俺って偉いなあ！

自分で自分を褒めまくるのは、

物心ついてからの日課だ。

会社では少し失敗もした。

本当は「少し」ではなく、結構大きな発注ミスをしてしまい、
上司と一緒に土下座する羽目になったのだけど、

終わったことをぐちぐち考えても仕方がない。

失敗は成功のもっとって言うではないか、

これを教訓に大きく飛躍できるはずだ。

どこまでもポジティブな自分を、
また褒めてみては、ほくそ笑む。
電話が鳴ったのは、そんな時だった。

相手は俺が初めて裸を見た女だった。

って、お袋じゃねえかよと、ひとりでボケてツツコム。

これは俺個人の性癖というより、関西人の性なのだろう。

「えっ？よう聞こえへん」

ぐつぐつ煮える鍋の音を避けて、

俺はリビングに移動する。

「なんやて？」

静かな場所でもお袋の声が上がっていてよく聞こえない。

「あ？親父が帰ってきたあ？」

思わず出た素っ頓狂な声に、美幸はキッチンでポカンと口を開けて
いる。

そりゃそうだろう、

何度も繰り返すが、親父は半年前に死んだのだ。

「ゴーストやろか？」

大儀そうに助手席に乗り込んだ美幸が、

俺の顔を覗き込むようにしながら言った。

俺は後方を確認しながら、ゆっくりと駐車場から車を出す。

電話ではさっぱり要領を得ないから、

とりあえず行ってみることにしたのだ。

「んな、あほな…やな」

美幸は即座にひとりでツツコミを入れた。

こういう所が楽でいい。

前に東京の女と付き合った時は大変だった。

こっちがボケると本気で怒るし、

突っ込むと拗ねる。

ひとりポケットツコミをかました日には、
口をきいてくれなくなった。

そんな事を思い出しながらも、

俺の頭の中には、いろんな想像が駆け巡っていた。

「とうとうキテしもたのかもしれへんな」

「どういふこと？」

「ああ見えて、繊細なところあるねん」

美幸がぷつと嘔き出した。

ないないないないない、右手を顔の前で横に振る。

俺は少しむっとした。

確かにお袋は太っている。

バストとウエストとヒップが同じサイズだということを、

ネタにしているし、

人一倍ガサツでもある。

今テーブルを拭いた台拭きで顔を拭いたりもする。

美幸はそれを知っているから笑ったのだ。それはわかる。

でもそんなお袋だって、親父が死んだとわかった時には、

誰よりも憔悴していた。

ご飯だって2杯しか食べられなくなってしまったじゃないか。

俺の表情が変わったことに気付いた美幸は、

自分で口にチャックをする真似をして、

少しうつむいた。

ちょっと可哀想だったかなと思ったのは、

間違いだった。

1分も経たないうちに、寝息が聞こえてきたからだ。

美幸はお袋に似ている。

それを聞いたら、本人は怒るだろうけど。

1話 はじまりの電話（後書き）

ありがとうございました。

今まで掲載していた7話までと、8話も掲載しますので、
よろしく願います。

2話 父、現る！

俺たちのマンションから実家までは、車だと15分程だ。慣れ親しんだ町内の裏道を、すいすいと走りながら、やっぱり同居した方が良かったのかなと考えた。

葬式の後、同居してもいいわよと美幸は言ってくれたが、やんわりとかわした。

嫁姑問題の怖さは、ワイドショーでみのもんた氏にずいぶん教わったのだ。

間に挟まれる俺がたまったもんじゃない。

スープがちよっと冷めるぐらいの距離が

いいに決まっているのだと思っではいたが、

お袋がもし呆けてしまっているのだとしたら、

このまま一人ってわけにもいかないのではないか。

住宅街の中の古い一軒家の前で、

ところどころ欠けたブロック塀沿いに駐車をしてエンジンを切った。

眠そうな顔でボーっとしている美幸をつついて、

車から降りる。

案の定、玄関は無施錠だった。

「お母ちゃん？ ただいま」

わざと大きな声を出した。

「隆志！」 ひっくり返った声と同時に

ドタドタドタと大きな音がして、お袋が走ってきた、というより転がってきた。

美幸はまた噴き出し、慌てて口を押さえた。

お袋は二重あごをガクガクふるわせている。

「た、た、大変や、お、お、お」

言葉が出てこないものだから、足をじたばたする。
電池が切れかかったおもちゃのようだと、息子の俺でも思うのだから、

美幸が笑うのも無理はない。

とはいえ、笑っている場合じゃないのも現実だ。

「大丈夫か？熱でもあるんか？

どっか痛いところあるか？」

「何言うてんねん、あんた！お、お父ちゃんがな」

お袋が俺の腕をぐいと掴んだ。

家の中はシーンとしていて、茶の間にだけ電気がついていた。

「疲れて夢でも見たんやて」

お袋に引っ張られるままにやってきた茶の間は、
いつもと同じ風景だった。

昭和テイストのそこは、中央に丸い卓袱台があり、
茶箆筥の隣には大きな仏壇が置かれている。

お袋が黙って茶の間に続いている和室を指差した。

その指の先に視線を向けた俺は、固まった。

薄暗い和室の押し入れの前あたりに、

ぼんやりと人影が浮かんでいる。

俺と美幸は手を取り合い、そろって息を飲んだ。

「えっ？な、なんや？」

必死で冷静を保とうとする俺の耳元で、

美幸が「見て来て」と囁く。

その声は震えてはいるがしっかり命令口調だ。

俺は仕方なく恐る恐る近づいた。

自分でも情けないぐらいへっぴり腰でだ。

「・・・あの・・・どちらさんですか？」

何を言ってるんだ？俺！

影がすくつと立ち上がった。

俺と美幸は同時に「ひっ」と声にならない声をあげて、尻もちをついた。

腰が抜けた俺に、美幸の身体を気遣う余裕はなかった。

俺は情けない格好のまま動けなくなってしまった。

人影がゆっくりと茶の間に入ってきた。

見覚えのあるちよつとメタボなシルエット。

「お、お、お父・・ちゃ、ちゃん？」

俺はほとんど無意識のまま、仏壇の前に這っていき、

チン！と鳴らした。

なんまいだ、なんまいだ、なむあみだぶつ、なんまいだ：

ふと気付くと隣で美幸もわけのわからないお経を唱えている。

いきなり頭に衝撃が走った。

「阿呆！」

やっぱり聞き覚えのある声の主が、俺の頭をはたいたのだ。

恐る恐る見上げたその顔は、仏壇の写真と同じだった。

それから視線を下げて足を見てから、そつと触ってみた。

「足や：足ある」

2話 父、現る！（後書き）

ありがとうございました。

3話 えらいこっちゃ!

「誰や…俺を殺した奴は」

自分の遺影が飾られた仏壇の前で親父が口を尖らせている。

「誰や…って言われてもなあ」

すっかり落ち着きを取り戻したお袋が苦笑いをしながら、俺を見た。

俺？俺か？って、俺じゃねえし。

「警察が来てな、アパートが火事になったって言わはってな」

「火事？」

「全焼したから、遺体も遺品も炭になってしもたみたいやって、言わはってな」

「そんな、ええかげんな事…信じるお前もお前や」

美幸がお盆にお茶を4つのせて入ってきた。

卓袱台の上にお茶が配られると、なんとなくそれぞれ茶碗の前に座った。

「あのアパートは引き払ったんや」

「聞いてませんでしたわ」

お袋がお茶を一口飲んで、親父をちらっと横目で見る。

「まあ、いろいろ事情があるんや」

動揺を隠すように親父は声を荒げた。

負けじとお袋も言い返す。

「ちゃんと大家さんにも確認しました」

「あの大家はボケとんねん」

「そしたら今までどこにいたはったんですか？」

「それは…そう、そうだ、そうやろ」

親父の視線が俺に来る。

知らんてそんなん。

俺が視線をそむけた途端、親父が逆切れした。

「亭主が死んだかどうか、わからんのか！」

それはムチャクチャというもんだ。

俺と美幸は顔を見合せてため息をついた。

美幸がにっこり笑って、口を開く。

「無事に帰ってきはったんやし、一件落着、めでたしめでたしって事ですなえ」

お袋が天を仰いだ。

「阿呆か」

お袋は座りなおして俺と美幸に向き合った。

珍しく真剣な表情で、頬の肉をプルプル震わせる。

「何がめでたしめでたしや。三ヶ月も前に葬式までしてしもたんやで」

美幸は小首を傾げている。

「今更、実は生きていました・・なんて言えるかいな」

お袋が親父を見た。

「な、なんや？それは。俺が帰ってきたら、迷惑やっと言うんか？え！」

親父もムキになって口調を荒げる。

お袋はまたお茶を飲んで、今度は親父に向き直った。

「ほな、言わしてもらいますけど、葬式に来てくれた人に、なんて言うてまわるつもりなんですか？」

「別に何も言わんでええやろ」

「香典もぎょうさんもろてますけど」

「返せばええやろ：使うてしもうたんか！？」

「葬式代、いくらかかったと思ったはるんやか」

お袋がさらっと言い返してから、はっと目を見開いた。

「えらいこっちゃ！それどころやあれへん」

「なんや！？まだなんかあるんか？」

お袋はおもむろに立ち上がって、おろおろしはじめた。

「大変や！こちら、詐欺師になってしまうで」

俺と美幸はわけがわからずお袋を見た。

お袋はズボンからはみ出した腹の肉をポンポンと叩いて、
見開いた目を俺たちに向けた。

「保険金、全部使ってもうたやんか」

4話 こうなったら・・・

親父が呆氣に取られた顔で、俺たちを見渡している。そうや、俺たちは親父の生命保険金を使ってしまった。受け取ってすぐに、すっきりすっかり全部まるごと。

南国特有のエメラルドグリーンの海に囲まれて、ど派手なムームーを着て華やかなレイを首に巻き、ジャパニーズオノボリサンまるだしで踊りまくった。飛行機はファーストクラス、超高級ホテルにリムジンで乗りつけ、豪華な料理に舌鼓を打った。

この期に及んでも残りものを持ち帰ろうとするお袋を制して、俺たちは地球環境の事も、今、この瞬間も飢えて亡くなっていく普段はちまちまと募金を送り続けている子ども達の事もしばし忘れて、

無駄に料理を注文しまくった。

温水プールで泳ぎ、ジャグジー風呂を楽しみ、マッサージと女性陣はエステも受けた。

「顔が半分になったみたいや」

半分になったところで人の二倍はあるお袋が、嬉しそうに頬を叩いた。

妊娠後期に入り、あちこち痛がっていた美幸は、

マッサージが気持ち良かったと、

マタニティーブルーもどこへやら、始終ご機嫌だった。とにかく俺たちは、生涯初めてで二度とないぐらいのぜいたくをわずか10日間で味わいつくしたのだ。

「なんやねん、それは」

そこまで聞いた親父が、脱力した声を出した。

なんやねん、それは、が正しい。
確かにあの頃の俺たちは完全にどうかしていたと思う。

お袋は青ざめた、泣きそうな顔で親父を見た。

「どないしょ」

親父はがくつと首をうなだれ、肩を落とした。

美幸が俺をつつく。

「お父さん、落ち込んだはるやん」

そんな事、わかってるて。

「こうなったら…」

お袋がうつろな目をしている。

みんなの視線がお袋に集まった。

「こうなったからには…ほんまに死んでもらうしか、あれへんな」

美幸が慌ててお袋をゆさぶった。

「お母さん、何言うたはるんですか！」

親父がゆっくりと立ち上がった。

俺と美幸は両側から親父の足を掴んだ。

親父はその手を振り払い、大きなため息を残して茶の間を後にした。

「ちよ、ちよとお父さん！」

美幸は慌てて立ち上がるとするが、思うように動けない。

「もう、隆志！お父さん、出てっしてもたやん。はよ、追いかけん
と」

お袋はぶつぶつ言いながら、部屋の中を歩き回りだしている。

このままお袋を放ってはおけないし、

俺は頭の中がごちゃごちゃになって、一瞬気が飛んだ。

「もう！隆志の阿呆！」

ようやく立ち上がった美幸がさっきの親父と同じように俺の頭をは
たいた。

お袋はどこからか電卓を持ち出して、なにやらせっせとたたき出
している。

美幸がわざとドタドタ足音を立てながら、
茶の間から出て行った。

俺だけが何をすればいいのかわからない。

あかん、こんな男やったんか、俺は！

珍しくネガティブに落ち込んだ。

って、落ち込んでる場合やないのに。

4話 こうなったら・・・(後書き)

ありがとうございました。

5話 お父さん、待って！

自分のお尻を拭くのも大変なぐらい大きなお腹を抱えて、足も腰もビシビシ痛いんだけど、隆志もお母さんも一向に動く気配がないから、あたしはお父さんを追って外に出た。

12月の風は身を切るような冷たさだ。

なにお父さんは上着も着ないで飛び出した。

あんな事言われたら、いたたまれなくなるに決まっている。なんて事言う家族やねん、まったく。

でも、今はあたしもその一員だから、見て見ぬふりはできない。

意気込みはどこへやら、5分も歩かないうちに後悔が襲ってきた。

これがドラマなら「ここにいると思った」とか言って、すぐに巡り合えるものだけど、

土地勘のないあたしに、お父さんがどこにいったかなんて、わかるはずもない。

慌ててたから携帯電話も置いてきてしまったし、お財布も持っていない。

しかもあたしは、病的な方向音痴なのだ。

ここはどこやねん…

ほとほと疲れ果てた頃、公園をみつけた。

ちよっと一休みして、誰かに道を聞こうと、

あたしはベンチに近づいた。

隣のブランコが揺れている。

こんな時間に？ もしや不審者が？

そんな、あたしは妊婦やで…見たらわかるやろうけど、

太ってるわけやないで。
って、お父さん？

あたしはゆっくり近づいた。

お父さんはブランコを揺らしながら、鼻歌を歌っている。
まるで黒沢明の映画やんかい。

少し戸惑ったけれど、声をかけることにした。

「お父さん」

あたしに気付いたお父さんは、
慌ててブランコを降りてまわりを見回した。

「美幸さんだけかいな」

「すみません」

「別に謝らんでもええけど」

あたしはお父さんに持ってきた上着を渡した。

お父さんはちよつと頭を下げて、上着を着た。

「あの…」

「なんや？」

「みんなビックリしてしもただけですから」

お父さんは苦笑いを浮かべて、あたしから目をそらした。

「せやろな。死んだと思ってた人間が帰ってきたんやからな」

お父さんが上目づかいでちらつとあたしを見た。

答えに窮したのと、軽いお腹の張りを感じて、

あたしはベンチに腰をおろした。

重みでベンチがギシギシいって、ちよつと恥ずかしかった。

お父さんもちよつと離れて腰をおろした。

「お父さんが亡くなったって聞いた時も、
おんなじリアクションやったんですよ」

お父さんは、黙ってうつむいている。

「駆け付けた時にはもう骨組だけを残した感じで焼けてしもてたんです。お母さんと隆志さんは、その前で、ワンワン泣きはりました。

ほんまに、子どもみたいに」

お父さんは、まだ顔を上げない。

「それからはもう、なにがなんやわからへんうちに、お通夜もお葬式も終わって…」

「で、それから保険金で遊びまくったというわけやな」

お父さんは、大きいため息をついて両手で顔をごしごし擦った。

「お父さんも一緒やったんですよ」

「えっ？」

お父さんがあたしを見た。

「南国の海も一緒に見ました。リムジンにも一緒に乗りました。美味しいご飯も一緒に食べました。お父さんの席も用意して、テーブルチャージも払ったんです」

本当にお母さんは、あのケチで大雑把なお母さんが、お父さんの遺影を片時も離さなかったのだ。

「お父さんは贅沢したことない人やったからって、

お母さん、思いつくままの贅沢を」

お父さんが、あたしの言葉を遮る。

「そんな事、頼んでない」

お父さんは立ち上がり、歩き出した。

「お父さん！」

あたしは慌てて呼び止めた。

「なんや？まだなんかあるんか」

「あの…」

お父さんが振り返った。悲しみと諦めの入り混じった老いた目があたしを見た。

「帰り道、教えてください」

5話 お父さん、待って! (後書き)

ありがとうございました。

6話 名探偵おふくろ登場？

何かにとりつかれたかのような表情で、

一心不乱に電卓を叩いていたお袋の手が、はたと止まった。

「あっ」

「何？」

所在なく部屋の中をウロウロというより、

ただただオロオロと歩きまわっていた俺は、

自分自身を落ち着けるように、お袋の前に座った。

お袋が俺の方にぐっと身を乗り出した。

凄じ発見をした子どものように目がキラキラ輝いている。

ついでにありあまる頬の肉を震わせながら、口を開いた。

「誕生日や：お父ちゃん、今日が誕生日や」

俺は唇の脇で笑った。

死んだ人間の誕生日を祝うなんて、

天皇陛下やら博士やら大臣やら芸能人やら、

とにかく一部の特権階級の人だけやろが！

って、親父、生きとったか。

「60歳や、定年退職や」

おいおい、とつくに死亡退職してるやんかい。

「それで単身赴任から帰って来たんと違うんか？」

お袋は積み上げられた書類の中から、一冊の通帳を俺に見せた。
目を通して驚いた。葬式の後にも毎月、振込がされているのだ。
親父が勤め先の名前も印字されている。

「え？ どういうこと、これ？」

「この前、記帳した時には、なんとも思わへんかってんけど、
ほら、お金の感覚、麻痺してたからな」

それは、麻痺しすぎや。

お袋は急に名探偵のような表情になった。

「これは、たぶん偽装工作やな」

「何や、それ？」

俺の呆れた声を聞いて、お袋がフンと鼻を鳴らした。

「お父ちゃんは、なんか事情があって会社を辞めたんや」

「えっ？」

親父は超がつくほどの仕事人間だと、俺は今まで思ってきた。

少なくとも俺が子どもの頃には、仕事仕事で、

遊んでもらった記憶もあまりない。

たまの休みに旅行に行っても、疲れた疲れたと寝ている姿が
思い出された。

そんな親父が家族に内緒で会社を辞めるなんて想像できなかった。

でも長年連れ添ったお袋には、何かピンと来るものがあるのかもしれない。

「辞めたことがばれへんように、こうやって送金を続けた」

「まさか」

「で、やっと60歳の誕生日を迎えて、

定年退職や！って事で大手を振って帰ってきたら、

死んでたって事や」

「なんで、そんなややこしいことせなあかんねん」

「ややこしいことを隠すためやろな」

お袋はまた、きらっと目を輝かした。

それにしてもさっきまでの狼狽はどこへ行ったのだろうか、女は強い。

美幸も強い、って、美幸はどこへ行ったんや？

俺はようやく美幸がいない事に気付いた。

かけてあった上着がない。

ということは、親父を追いかけて外へ行ったのだろうか？

こんな寒い夜にあの身体で！？

しかも美幸は自分の家への帰り道すら時々おぼつかなくなるほどの、超ド級の先天性方向音痴だ。

俺が慌てて立ち上がった時、家の電話が鳴った。妙な胸騒ぎを覚えて、俺は慌てて受話器をとった。

「はい、森田美幸は妻ですが。は？病院！？」

受話器の先からなのか、家の近くなのか定かではないが、小さく救急車の音が聞こえる。

俺の心臓はまたもや猛スピードで動き始めた。

7話 しげちゃん

電話はすぐ近くの総合病院からだった。

美幸が急な腹痛で運ばれたらしい。

うろたえる俺とは対照的に、お袋は堂々としたものだ。

「もう臨月やろ？ほな、ちょっとなんかあっても大丈夫や、母親もお腹も子も体制が出来上がってるわ」

ちよっとなんかあるのが怖いねやんかい。

この数時間でつくづく己の小ささを思い知らされる。

ポジティブシンキングの日課は、

この小ささから逃れる術やった気がしてきた。

病院に着くと、俺たちは婦人科に案内された。

この病院には俺も美幸に付添って何度か検診に来たことがあった。

母親を早くに亡くした美幸は、

里帰りはせずに、自宅近くのこの病院で産むつもりだった。

エレベーターを6階で降りると、診察室の前だ。

昼間のそこは違って、しんと静まり返っていた。

一番奥が分娩室になっていたはずだった。

分娩室前の待合辺りに、またもやシルエットの親父がいた。

落ち着きなく立ったり座ったりを繰り返している。

「えっ？」

俺はお袋と顔を見合せた。

なんで親父がここに？

もしかして親父がここに？

美幸は親父と一緒にだった？

俺の頭に？マークが広がっていく。

それにしてもいくら緊急事態とはいえ、

あんなやり取りの後で、家を飛び出した親父と顔を合わせるのは気まずい。

お袋もきつと同じ気持ちだろう…って、この人は例外だった。いつの間にか缶コーヒーを3本抱えている。

「熱っ、熱いなあ、まったく」

今にも落としそうな缶を、親父がすつと受け取った。

こういうのをあうんの呼吸というのだろう。

30年近く連れ添った夫婦にこそ出来る芸当だ。

半年ぐらいのブランクも、

さっきまでのいざこざも関係ない。

長年、「今」を生きてきた夫婦なのだ。

俺は長椅子に親父とお袋と並んで座り、外側だけ熱い缶コーヒーを飲んでいる。

昨日は想像もしなかった風景だ。

しかもここは分娩室の前だ。

何が夢で何が現実かわからない、

浮遊したような感覚に包まれていた。

「…産まれるんやろか」

俺の口が勝手にしゃべった。

「そりゃ、産まれるやろ」

親父が横を向いたまま、ぼそつと言った。

「ほんまに父親になるんかなあってな」

「男なんてな、まあ、そんなもんや」

お袋が俺を見て、ふっと笑った。

親父はくると背中を向けた。

お袋が懐かしそうに辺りを見回しながら言った。

「隆志もこの病院で生まれたんやで」

「ほんま？」

「そんなもん、嘘ついてどないすんねん」

俺は病院を見回してみた。当たり前だが、まったく記憶がない。

「綺麗に改装してしもて、当時の面影もないけどな」

お袋は小さな声で「儲かってるんやろな」と付け加えた。

俺の出生はこの人たちの証言によるところだけしか、明らかではない。

もしかして俺は、どこぞの王族の子孫かもしれない。

滅ぼされかけた一族の家臣が、王の純血を守るために俺をこの人たちに託して：RPGのやりすぎやな。

「えらい難産でな、大変やったわ。」

お父ちゃんも一緒に分娩室に入ってくれたんやで」

「へえ」

俺は親父の後ろ姿をちらっと見た。

「今やったら珍しいことないやろけど、30年前や、結構、ウケたで」

「ウケてどないすんねん」

親父が怒ったような口調で言った。

「阿呆、お前が死にそうな声で呼ぶからやろ」

「そうやったかなあ」

お袋がすつとぼけた声を出した。

「しげちゃん、しげちゃんって、情けない声出してたやないか」

しげちゃん？親父の名前は茂雄、お袋はしげちゃんなんて呼んでいたのか。

お袋は心なしか赤くなり、照れ笑いをしながら下を向いた。

「しげちゃん」

28年前、お袋が呼んだ声が聞こえたような気がした。

「お父ちゃん、真っ赤な顔して、

ひっひっふー、ひっひっふーってな、一緒にやってくれてん」

「お前が死ぬ死ぬ言うからやろ」

「手握ってな、ひっひっふー」

お袋の頭の中はもうタイムスリップしているのだろう。

「何時間も何時間も頑張つてな、ようやくお前が出てきた時はな」
お袋は何かを思い出したようにふっふと笑いだした。

「お父ちゃん、隣で酸素マスクはめられてたんやで」

親父がくると振り返って、お袋を軽くどついた。

「うるさい、もうええ」

「酸欠で倒れてしもたんや」

「もうええ！　いうてるやろが」

親父はまた背中を向けた。

そうか、しげちゃんは倒れてしもたんか。

俺はやっぱり王族の子孫ではないらしい。

7話 しげちゃん（後書き）

ありがとうございました。

次話からが、新しい場面です。
申し訳ありませんでした。

8話 ひつ、ひつ、ふー(前書き)

ここからが新規更新です。
よろしくお願いします。

8話 ひっ、ひっ、ふー

分娩室のドアが開いた。

恰幅のいい中年の看護婦が顔を出す。

「お父様は？」

ぎょろっとした大きな目が俺たちを見まわした。

どう見ても俺やろ！こんな時にも俺は本能的ツツコミを忘れない。

が、俺と同時に席を立った親父が、先に一步前に出た。

どんなボケや？

すかさずお袋が思いっきり親父の後頭部をはたいた。

「阿呆か」

年季の入ったナイスなツツコミだ。

親父がこれまた使い古されたリアクション、今はたかれた後頭部をポリポリとかいた。

看護婦は笑いをかみ殺している。

「た〜か〜しい・・・たかしい！」

ドアの内側から、今まさに身を引きちぎられているかのような美幸の声が聞こえた。

こんな場面にありがちな、か細い声ではない。

野太い、よく言えば演歌の女王がまわすこぶしのような、しっかりと響き渡る声だ。

お袋がきらきらした目で俺を見た。

「ほれ、お呼びやで」

この期に及んで、俺はうろたえていた。

ドアの先に待っているのは、魔人か悪の帝王かもしれないのに、俺ときたら、何の装備もなく初期設定のレベルだ。

このまま乗り込めというのか・・・。

「何やってんねん、あんたの子どもが生まれるんやろが」
俺の動揺を見透かしたように、お袋が後ろからどつく。
俺の子ども？

そうだ、魔人でも悪の帝王でもない、
俺と美幸の子どもが生まれるんや。

でも俺は王族の子孫やないみたいやし、
出世の見込みも薄い、月給袋も薄い、
最近髪は毛までもちよつと薄い、
こんな親父でもええんやろうか。

「手、握ってあげましようね」

看護婦の穏やかな笑顔と分厚い掌に背中を押されて、
俺はおそろおそろ分娩室に足を踏み入れた。

ついさっきまでのぼんやりした柔らかな顔つきとは
打って変った鬼気迫る表情の美幸が、
髪を振り乱して脂汗をかいている。

俺の足はまたもや、ぴたっと止まった。

やっぱり魔人が魔法をかけたのだ。

金の杖は？王者の剣は？

この魔法をとく呪文は何なんだ？

「ほれ」

お袋が俺を促す。

えっ？なんでお袋が、親父までもが中にいるんや？
混乱した頭の中で、またもや疑問符がぐるぐる回る。

「もうちよつとやで、頑張りや！」

お袋はいつの間にか美幸の足元にまわり、
一点を凝視している。

一緒に覗こうとした親父が、お袋に肘鉄をくらった。

何、考えとんねん！ずいぶん後になって、思ったことだ。
その時の俺は、その異常な状況を判断することすら出来ない状態だったのだ。

「ひっ、ひっ、ふー」

看護婦が美幸の呼吸と合わせながら、ぎよろ目を俺に向けた。

美幸も荒い息遣いで呼吸法を繰り返しながら、俺をじっと見る。

一緒にやれという指令だ！寸時に理解した。

どうやらどんな状況においても美幸の司令にだけは正確に反応するように、

飼いならされたらしい。

「ひっ、ひっ、ふー」

思春期の女の子が初めて告白するみたいにか弱い息が俺の口から洩れる。

目を合わさなくても、美幸が睨んでいるのがわかる。
仕方ない、自慢じゃないが、俺はリズム音痴なんだ。

両親学級でも居残りで補習を受けたが、講師が呆れるほど、だめやったろが。

方向音痴の母親とリズム音痴の父親を持った子どもの将来がちよつと気にかかった。

いや、無事に生まれてくれさえすればいい。

俺はこの時、はっきりそう願ったんだ。

と、やっぱりずいぶん後になって思った。

「ひっ、ひっ、ふー」

美幸の息遣いは加速度的に荒くなっていく。

途中に、ひーっと悲鳴のような声にならない声がかぶる。

気がつくとお袋も親父も「ひっ、ひっ、ふー」と合唱していた。

さすが俺の両親、そのリズムは少しずつずれているが、

なんだか微妙なハーモニを奏でている・・・気がする。

そうか「ひっ、ひっ、ふー」が呪文なんだ！

そんな事を考えながら、俺の意識はだんだん遠くなっていった。

8話 ひっ、ひっ、ふー（後書き）

ありがとうございました。

物語は、ここで折り返します（15話で完成予定）
感想など、いただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704i/>

父、帰る！？

2010年10月30日20時34分発行